

福岡

福祉活動専門員の

ま な こ

福祉活動前進のために

No.13 昭和55年12月発行 福岡県専門員連絡会 まなこ編集委員会 印刷 ひかり共同作業所



中学生のための

福祉体験塾の 成果とこれから

田川市社協
十時 智治

近年、学校教育は従来の「つめこみ教育」から「ゆとりの教育」へ変容している。これは従来のすがたが見直され、個々人の潜在的に持っている本質的な能力を引き出すには重要なことであり、現代のように学力競争の社会では、とうてい「ゆとり」というものは縁遠いものになっている。たしかに競争というものは大切なことであり、そ

れなくしては自らも社会の発展も望めない。そうすると、競争することの価値をどこに置くかが大切になってくる。こうしたことから、今年八月に四日間の日程で「福祉活動体験塾」を開催した。

今回の企画で感じたことだが、体験活動を通じ中学生に対する認識が、多少なりとも変ったようだ。私が想像する以上に、彼らは福祉というものに対し、何の抵抗もなくストリートに受けとめてしまうことには驚かされる。例えば、老人ホームでの食事の介助や、おむつ交換をとってみても、その一端かうかがえる。実に彼らは、難なく上手にやりとげるし、老人と接するときの目の輝きは、もはや同情的な要素はなく、何か、見えない糸でつながっているような、これこそ真の「ゆとりの教育」のよ

うに思える。

今回参加した子どもたちに限らず、すべての子どもたちが潜在的に持っているのだと思うし、この隠された能力をどこで引き出しどこまで伸ばしてやるかが我々大人としての責任ではないだろうか。

体験塾を終えた今、非常に素朴で自分の気持ちに素直に綴った感想文が寄せられた。

彼らはこの体験を通して、はじめは人ごとのように思っていたボランティア活動が、参加しているうちに、人ごとではなくなってきたのがよくわかる。未知の社会を知り、自分以外の人たちの立場を理解する心が育っているようだ。また、この体験が現在の自分の生き方の反省や、自分の生活を見直す機会ともなったようだ。

そして何よりもこれから先、彼らが社会に対する視野をいかにして広げ「自分たちにできることは自分たちで…」というような自立をどう養ってゆくかに、この企画の成果が問われると思う。

その後、この体験塾に参加した子どもたちが、自主的に今後も何かをしていこうということで九月七日に集まった。そこで今回訪問した特別養護老人ホームにこれからも行くことになった。またこのグループの名前を「かたつむり」と名付けたが、これは急がず、あせらず、一步一步ゆつくり進んでいこうというもので、これから活動に大いに期待をかけている。

家庭介護講習会

5年目を迎える一 期待高まる一

小郡市社協 田代重美



当市には、昭和五十一年七月当時、

在宅ねたきり老人二一八人、病弱老人世帯三三三世帯があつて、入浴の問題、病人の介護で非常につかれる、外出ができないという問題が、民生委員の訪問調査でわかりました。

社協では、介護人の苦勞について、少しでも手助けをするともに、地域においてお互いに助けあつて、連帯の輪をひろげていただくことを期待して、昭和五十一年度家庭介護講習会を始めて計画し、開催しました。

当初二ケ年間は、全市世帯に隣組を通じて回覧板を廻し、受講希望者について、市中央で年一回講習会を開催しました。

講習会を開催する中で、受講者の要望として、自宅から余り遠い会場には、出席が困難のため、地区毎に開催して欲しいという意見が出されたので、第三年度から行政区毎に開催し、本年

度で五ケ年 経過いたしました。

昭和五十五年度は、当市の北部にあたる三国校区の市民を対象に区長を通じて、回覧板によつて全世帯につき、受講希望者を募りました。

受講者は五十名に達し、非常に熱心に受講して、盛会裡に意義のある講習会を終りました。

講習会の最終日に、受講者について、アンケートにより受講の感想を聞きましたところ、

- 1、非常に役にたった。
- 2、もう少し早く受講しておればよかった。
- 3、もっと実技を多くとり入れて欲しい。
- 4、更に狭い地区を対象に開いて欲しい。
- 5、今後は地区の市民のためにも、習得の看護法を役立てたい。という意見



見が述べられました。

本講習会の開催については、三井保健所の全面的協力のもとに、実技を主体として、次の内容にて開催しました。

- 一、主催 小郡市社会福祉協議会
- 一、後援 福岡県三井保健所
- 一、期間 昭和五十五年九月十二日から九月二十六日まで五日。
- 一、午前九時三十分から十二時
- 一、場所 三国校区古賀公民分館



専門員の博多風

だべり

あたきん考えだけじゃどうしようもなかばい。社協は心配ごと相談所やらしよるばつてんが、社協の職員は心配ごととはどこに行つたら解決しちゃんなるうかいね。

ちよとくさ、あんた、開いちャつてんなつせ。このごろの社協はくさ、ちいたあ若か専門員は入れよるけんと思つて良うなつたやねと思つてよつたげな。そげん良かことばつかいやなかつちャけんね。そらあ良かこの社協じゃ、やつば会長さんとか局長さんとかが、専門員に仕事のしやすかごとしちゃんなるけん、専門員もやりがいのあろうと思つて入つてきとつちャけん仕事の中味のきつかとは、あんまり苦になりゃせんばつてん。その会長さんとか局長さんとかがくさ、かえつて仕事はやりにくかつたことしよんなるけんが、社協にいや気のさしよるとが中におおることあるばつてんが、こげなんだとげんしたら良かつちャろうかいね。

これは、局長と兼務してある専門員さんでも、違つた形での悩みがありまっしょうな。

まあ、今回はこれぐらいでやめときまっしょう。また、なんかあつたげな、別の機会に書きまっしょう。そいじやみなさんさいなら。

活動専門員 社協として

筑後市社協中山陽一

「こんにちは、地域福祉の推進について社会福祉協議会のはたすべき役割は多大……」と、よく社会福祉協議会機能がもてはやされているが、現実にはたしてどうだろうか。役割は大きくなってきているとはいえ、機能を果たしている現実があるだろうか。

専門員のボヤキ PART II



大川市社協 永田啓造

社協にはいつて五年も経過した今、やっとなことに気がついた。それは社会福祉協議会の「社会福祉」という言葉に惑わされていたんじゃないか、

この問題については、もはやここで言うまでもなく、各市町村の意欲ある専門員各位の胸内には、しっかりと「悩み」として、また時には「あきらめ」として納められていることと思う。

そんな現実（規定された）の中にあつて、私が少なくとも「こだわり」として持たない課題をあえて言葉に出すとすれば、『あなたは社協の福祉活動専門員として、どういう考えのもとに仕事をしたいと考えていますか』という点である。

「専門員とは何たるや」と問う時、現実の実態（社協）は、この問いさえも否決してしまふ。つまりは忙殺してしまう状況にある。しかし、それぞれと。

社会福祉という言葉から連想される活動範囲は、福祉六法から環境問題、社会教育分野に至り、福祉センターの委託まで引き受けて、最近では住民の意識が多様化したということで、際限なくその間口が広げられようとしている。それは、殆んど民間性の性格を持ちあわせていない現状の社協では、複雑業務的発想しかできなかつたらうし、又広く地域に還元するという共同募金の性格から由来していたんだらう。それゆえに、「冗談やなか、三人の職員で、なんでもかっでんでできるか。」という噴り、もしくは逃げ道をもいつも抱いていた。「まてよ」と、思った。最近の先進

の「専門員」としては、「専門員」である事、その意味は、現実の中では自ら問わなければならない課題となつていないのではないだろうか。

その問いを自ら問えば、『専門員として、福祉問題についてどういう考えのもとに仕事をするのか』という命題が頭に浮かぶ。

あなたはこういう考え（基本的な姿勢）のもとに仕事をされていますか？ 私には聞きたい。

多忙な中に行為のみが先行して思考が後追いつく現実。そこにそれをね返そうとする必死の努力には、なんともむなししいビエロの実態がある。そんなところで「多大な役割」だけ

社協の事例を見ると、魅力ある社協活動というものには、何かポイントがあるようだ。それは、一つの問題に対しての、社協、住民、ボランティア、既存資源を駆使しての徹底した、ぐるみによるとりくみにあるようである。それが訪問看護であったり、ボランティア問題であったり、障害者問題であったり……。要は一個の問題で地域活動を展開する。（つまり社協存在の確立）そこから他の問題への解決のみちを広げていくことが……。

それでは、我が街の福祉問題では、いったいどんなものがあり、何が一番深刻で、何が住民の眼をとらえていくのだから。思いかえせば、何一つ真の実態把握なんかできていないのである。

がカラ回りしている。私の今は、この命題についてジックリと取り組みたいと願望しているところ。

それには、多忙なだけではダメだと思ふ。

「やっついていれば安心する」という事には、あくまで抵抗したい。そこには形式のみが先行する現実がみえるような気がする。

フツと「対象者」を見ると、その人は冷やかな目でこちらを見ている。そんなことのないようにしたいものだ。



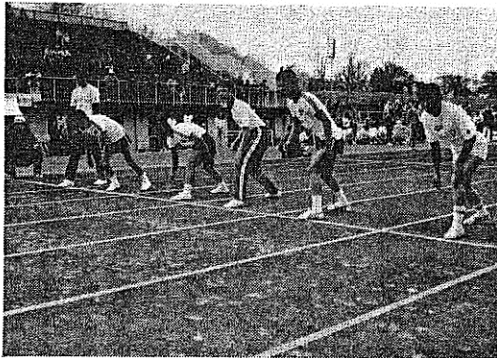
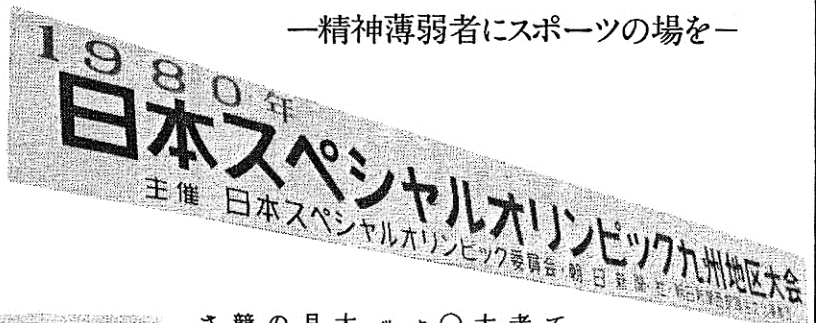
時間が足りないと思う。地域をたがやす地域そのものをじっくりと明確にする必要がある。それには、古い遺産めいた事業を打ちこわす努力をする必要がある。又、古い福祉意識の除去も必要と思ふ。社協活動対象というものは、依然として多数優先的であるが、どだい地方の小都市での福祉問題に多数がでてくるはずもない。独りの問題でもあえてそれに目を向けるのが、社協の姿であるということを、誰かれとなく言い続けていかなければ、と思ふ。考えてみれば、社協には見直していくことがずいぶんあるようだ。（例えば共同募金、それが、見直し論に終ることなく見直ししていきたい。

勇気を出して

さあ スタートラインへ



—精神薄弱者にスポーツの場を—



精神薄弱者のスポーツ やっとなスタートラインに

日本で初めての精神薄弱者の陸上競技大会「一九八〇年日本スペシャルオリンピック九州地区大会」が十一月二十日福岡市の平和台陸上競技場で開催されました。

この大会には、九州八県の精神薄弱者施設などから七五三人が参加し、トラックで、フィールドで精いっぱい力を出し競いました。

当日は、あいにくと雨がふったり、曇ったりで少しは寒い一日でしたが、みんな元気がいっぱい走りまわっていました。競技種目はトラックでは、200m走から1500m走までの個人と400mリレーの団体まで十種目があり、また、フィールドでは立幅とび・走り幅とび・ソフトボール投げの六種目となりました。

この大会の主催者である「日本スペシャルオリンピック委員会」「朝日新聞社」「朝日新聞西部厚生文化事業団」でも、たいへんなことだったと思います。

しかし、このスペシャルオリンピックが、精神薄弱者みんなのことを考えて行なわれるようになれば、大変有意義なことになると思います。…今回の参加者の中で在宅の人たちは、ほんの教えるほどで、大部分が施設入所者で行なわれたということが、一つだけ気がかりなことでした。せひ、今後ともこれを続けていくためにも、施設入所者だけでなく、在宅者にも「勇気を出して、さあ、スタートラインへ」と呼びかけていこうではないですか。

また、市町村では、その市町村民運動会などに、せひとも障害者もいっしょに参加できるようにできれば、今以上に障害者についての理解をしてもらえらると思います。

さあ、スタートラインへ
今回の大会は、まったく初めての試みでしたが、陸上競技会や大学・高校など百人以上のボランティアの協力があり非常にスムーズに行なわれた。

このスペシャルオリンピックは、精神薄弱者のために計画され、精神薄弱者の楽しみと成長を最大限に引き出すために工夫された精神薄弱者のためのスポーツ大会です。この大会の理念は、古代ギリシャのオリンピックの精神を尊重

し、勝つことよりも参加すること
を重視しています。

スペシャルオリンピックは一九六八年、アメリカのJ・Pケネディ財団によって創設され、現在世界四十カ国が参加し、毎年一回の国内大会、四年ごとに国際大会が開かれています。すべての競技種目に、八歳以上の精薄者ならだれでも参加できます。

精神薄弱者に勇気と成長をもたらすスペシャルオリンピック。スポーツを通して世界の人たちとの交流を深めようと、我が国でも日本スペシャルオリンピックが、全国に先駆け九州地区で来たる十一月二日、福岡市平和台陸上競技場で開幕されます。精神薄弱者にとって最も必要なのはスポーツによる体育訓練です。ハンディをもつ彼らの機能を回復させるには、まず体力をつけてやるのが先決だからです。

大会の当日、多くの精神薄弱者たちが自己の可能性を求めて参加してきます。記録上の勝負はあっても、勇気を出してスタートラインに着くまでの精神的な起き上がりがあれば、彼らに敗北などありえませんが、単なる競技上の勝敗よりも、それまでの努力と大会に参加してきた勇氣に感動し、祝福します。精神薄弱者が何もできない人間だと誤解されるのは悲しいことです。また、現実には身にまわりに彼らのような人間がいなければ、人びとは大抵彼らの事には無関心

日本スペシャルオリンピックは全国大会と地区大会が行われます。全国大会は、年一回全国各地から集められて全国大会を開催し、国際大会の準備となるものです。第一回大会は来年十月三日、四日の両日に神奈川県で開催されます。地区大会は、出場する選手の心身の質の向上を図るために開催され、全国大会に出場する準備となる

スポーツを通して

社会参加を

ようになるのです。彼らはほめられることよってさらに一生懸命努力を続け、その道のりは遠くとも必ず何らかの発展を遂げています。従順でごまかしのない性格は就職先でも大変気に入られ、心ある企業側からは彼らの求人を受けまわっているほどです。自分の歩む道は自分で築こうとする前向きな気持ちは、かえって私たちよりも積極的なのではないかと感ずるくらいです。

ものです。

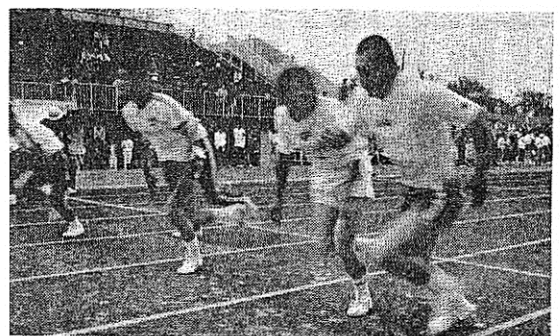


動物をこよなくかわいがり、いくつになっても両親を誰よりも慕う純粋な精神薄弱者たち。彼ら自身は決して人前に出ることを恥ずかしいとは思っていないのです。むしろ私たちが勝手に彼らを陰気で暗いイメージに作り上げてしまっているのではないのでしょうか。来年からは国際障害者年も始まります。日の目に当たらない精神薄弱者を、これから先はもっとと表面に出してやる必要があります。同情やあわれみよりも彼らに正面からぶつかって、とにかく私たちとの接触を多くしないことには、彼らの前途に決して光明は見られません。勝敗よりも参加することを第一目的とするスペシャルオリンピック。九州地区大会から国際大会にまで発展させるため、皆さまのご支援で、ぜひ今大会を成功させたいと思います。さあ勇気をもって、今こそ跳べ。精薄者たち。

十月二日 朝日新聞より



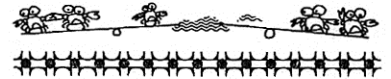
最後まで一生懸命に



さあ、ガンバッテ



母子会の他市 交流会で得たもの



荏田町社協 井本美良

「まなこ」原稿当番にあたり、老骨三年生の専門員が、我が町母子福祉会の活動の一端を述べ、その責をふさがせて頂きます。

母子福祉会の活動に新風と自主性を投入する方法は、先進団体との交流が最短距離だとの発想の基に、隣接、北九州市母子福祉会との経験交流会を催しました。

時、昭和五十五年 九月九日

所、北九州市母子福祉センター

団体は、北九州市母子会員一千名

荏田町母子会員三十名

(懇談項目)

- 1、若年母子の加入促進
 - 2、母子家庭の調査
 - 3、母子会のPR
 - 4、母子会の奉仕活動
 - 5、行政、社協とのかわり方
- 意見の交換に先立ち、各自の自己紹介を述べあって、近親感を深めながらあらかじめ打合せた項目へ――。

提起された課題は母子会活動の根幹の柱として、社会から課せられた命題でありますだけに、北九州各区の母子会、荏田町母子会共に、それぞれの地域性と実状にそった実践と、取り組みがなされて来たと思えますので、となりの市、町同市の団体であるというよしみの中で、気軽な意見交換下さい。との、北九州市の沢田母子会長の滑らかな司会の中に、意見が次ぎつぎと展開いたしました。

一、若年母子の現在の状況の認識を充分理解した上での加入活動を、役員の手で継ぎとること。

二、地域別の懇談会を、地区公民館で夜間催し、本部役員が出向いて、茶菓子を食べる等、状況を整えた上で、若年母子の苦勞をめでながらお互苦勞を分かち合う。

三、戦争未亡人の食糧難と子育て体験談を語りあう中で、若年母子との心の交流。

四、母子の会、運動会、一日バス旅行、一日お父さん行事などを通しての世帯間の交流と話題を深めて、人間関係を深めた。

五、民生委員、区長、婦人会、婦人会等、社会資源の援助、利用のお願いの中で、母子会の発展を計る。

六、福祉制度のPRと、その利用手続の協力による母子会の輪を広げる。

七、福祉の消費者としての母子会が、その供給者としての奉仕活動への転進の道、方法を模索する。

八、経験学習、循環学習

出る↓話す↓悩む↓方法↓行動

このサイクルの中に、時代に遅れない組織活動が体得される――。

終始、なかなか雰囲気の中に、実践者の意見だけあって、ピカピカ光るものを感じあひながら、交流会を終りました。

沢田会長より、大変実り多いものがありました。またの再会を楽しみに致しましてとの言葉を頂き、小倉を後

にしました。

「後日談」

荏田母子会員は、「退職品」利用で「おむつ」を作り、社会福祉協議会にねたきり老人家庭へ届けて、慰問させて頂きとの申し出を頂きました。

交流会での意見が発想を生み、行動となって現れたことを喜びながら、寝たきり老人宅を慰問して大変喜ばれました。

BOOKあらかると

点字の父

イリブライユの

今号の「まなこ」を発行するのにも、もう少し原稿が足りなくてどうしようかと思っていた。

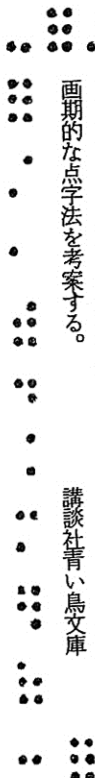
感動の半生」と書いてありました。

その日の夕方、たまたま、本屋で何かおもしろそうな本がないものかと思つて眺めてみると、この本、目が見えなくてもという題名が目に入り、これは何かと思ひ裏表紙を見るとそこには「幼いころ事故によって失明したルイは、家族をはじめ、周囲の善意あふれる人々の尽力によって盲学校に入学する。やがて、盲人のための文字の必要性を痛感するようになったルイは、長く困難な研究のすえ、ついに画期的な点字法を考案する。」

『目が見えなくても』

四五〇円

講談社青い鳥文庫



同情より理解を

塚市社協
石上 淳 祐

「なんが一番つらかね?」
—それは自分の持病(もちびょう)がつらか—

先日、県社協との共催で七回にわたって開催した「点字入門講座で、感銘深い講演を聞いた。講師は福岡点字図書館長の永野武治先生である。

先生は「盲人福祉とボランティア」の中で冒頭から「ボランティアは同情



社協マンに変身!

「さあー。らっしゃい、らっしゃい。奥さん、今日はキャベツと大根が安いよ。買わなきゃ、損だよー」
と、ユニードの青果部で野菜をたたき売っていた男が、どういふ訳か宗像町社協へ。

社協の社の字も知らず飛び込み、知らない者の強味(?)かどうか、訳もわからずこの一年間、がむしゃらにやって来ました。

よりも理解とよくいわれるが、私はむしろボランティア活動は同情そのものであると考えている。ボランティアは同情という原始的な行動の発露である。人の痛みを我が身の痛みとして受ける、この内からつきあけてくる力が奉

今年四月にやっと念願の専門員の肩書もらい、庶務との二足のわらじながら、それなりに頑張っています。

現在、福祉主事認定通信講座を受講中ですが、毎回レポートのメ切に追われています。二期学などは、九月一杯がレポート提出期限と勘違い。実は十五日がメ切と気付いたのが九月の二日、なんとか十三日に速達で出したもの、メ切にまにあったかどうか。

こんな訳で、はなはだあぶなっかしい専門員ですが、人との出合いを大切にして、今後も頑張っていきたいと思

います。
諸先輩方、よろしくご指導・ご鞭達下さいませようお願ひ申し上げます。

最後に自己紹介を、氏名「内野英雄 宗像町社協勤務。三十一歳。結婚して一年半です。十一月二十一日に女児のババになりました。

仕活動のエネルギーである。理解ということは、それによって高められる人の勉強ではないだろうか」と、真剣に語られた。

私はこの世界に入って、ボランティアは「同情はいりません。理解をして下さい」という言葉を最初に耳にしたとき、理解ということの具体的な表れは何なのかなーと、ふっつきれない疑問を持っていたので、手をたたく思いで拝聴した。

先生はさらに、Nさんの手記というのを紹介された。ある人が、目のみえない人と、耳のきこえない人と、どちらがつらいかと問いかけた。Nさんは「それは自分の持病(もちびょう)が一番つらかー」と答えたという。

私も、耳が不自由より目が不自由の方が困るだろう。いや車いすの生活の方もと苦しいだろうと、語ることもあるが、それは第三者のいうことである。その人にとっては、持っているものが痛いとなるとき、軽、重、問わず、苦しくつらいのであるというふうに聞いた。

私には、先生の「他人ごとでないという痛みを感じる」ことがボランティアへかりたてるのであり、同情のエネルギーを持統性のあるものにするのが理解ということだと思ふ」という言葉がいまも耳に残っている。

私は特別養護老人ホームで老人に接するとき、わが母や父を想い、車いすに接するとき、自動車事故で、間一髪

で骨折ですんだ自分の姿を想い、心身障害児のひかり号旅行に参加した色白の可愛い子供を抱きあげたとき、自分の子供に想いをよせ、その親ごさん達の心情に胸が痛むのである。ホームにすべりこんでくるひかり号を見て、言葉が出ないのにノドをならし、不自由な足をいっばいに伸ばして喜んでいる子供の姿に、自分の子供の顔が重なり、いとおしくなる。そして私たちは、この日一日、その子たちにかかわって、いれたいのだが親ごさん達は、帰ったらまた子供にかかりはてなくてはならないと思うと、気が重くなる。

施設を訪ねるとき「可愛いそうにー。わが子でなくてよかった」とは一番の禁句とされているが、可愛そうにと、その子たちに想いをよせ、心からの幸せを願う心を持つ人ならば、それが必ずその人の生き方に影響を与えるはずである。そういうあなたがかい心を持って、からだの不自由な子供たちを指さしてささやきあったり、自分の子供をしかるのに、あなたなんか特殊学級に入りなさい、なんていう言葉は出ないはずである。

私が社協で働いていて、萎える心をむちうち、襟を正さしてくれる原動力は、やはり他の人のいたみが伝わってくるからである。

単純で涙もろい私は、勝手に相手の気持ちをはかりすぎて疲れることぎあ。しかし同情の気持がなくなったら、乾いてしまう気がする。

連 専 福 だ よ り

お知らせ

前号より、この「まなこ」を全国の市区町村社協に配布できるようにになりましたが、各県社協の担当者には、迷惑をかけているものと思います。今後、迷惑をかけますが、よろしくお願ひいたします。

前回の発行によって、数は少ないですが、他県内の市町村社協職員の方からの反応がありました。それで、今後は、この「まなこ」をみなさんの交流の場に、紙面をとつてもよいのではないだろうかと思つていきますので、福岡県内の市町村社協の活動内容や個人的に聞きたいことがありましたら、「まなこ編集委員会」あてに文書で質問し

てくださいますようお願いいたします。

「こころうさん」

「よろしく」

このたびの会員の新旧交替は次のとおりとなっております。

- | | |
|------|-------------|
| 穂波町 | 武田 信義(退職) |
| | 井上 英晴(新規) |
| 田主丸町 | 高尾 直樹(死亡) |
| | 穴見 岩男(新規) |
| 大野城市 | 船越 希喜(退職) |
| | 河上 洋子(新規) |
| 豊津町 | 杉本 勝次(役場異動) |
| | 進 礼次郎(新規) |

講師謝礼助成金

各ブロックの専門員連絡会開催の際に講師を呼んで研修等をする場合に、一カ所に年額二万円を限度として、助成金を出すようになっていきますので、各ブロックの会長さんは研修 開く場合には、県連絡会長までお知らせ下さい。

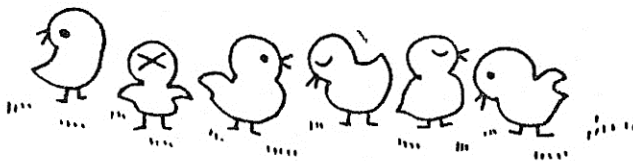
本年度会費未納

専門員連絡会では、各市町村社協からの会費が唯一の財源となっておりますが、現在まで、那珂川町・芦屋町・山川町・豊津町の四社協からの入金がありませんので、早急に納入してくれるようにお願いします。

社協の広報紙

現在、市町村社協で独自の広報紙を作成配布しているところは、たくさんありますが、市町村住民だけでなく、同じ仕事をしている仲間である他市町村社協にも配布できないでしょうか。もし、印刷に余部があれば、百部以上になりませんが、県社協まで送つてもらえば、各市町村に配布したいと思つていきます。……今も数カ所分は送付していますが、今以上に多数の社協広報紙をお待ちしています。

1981年は国際障害者年です。
でも、トリ年も忘れないでください。



◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

■「まなこ」の割付のあい間の昼休み、わが社協前の緑道公園は、のどかな小春日和。空は青く澄み、平和そのもの。思わず背を伸ばし、空気をいっぱいすいこんだ。

と、そばで六、七人の小学生が、スチロール製の実物をつくりのヒコキをとぼしている。僕のは、米軍戦闘機ヘルキヤット。僕のは、ウルフ。僕のは、日本の零戦。一人の子は、その性能まで得意げに話してくれた。

■最近しきりに、ソ連の脅威が伝えられたり、国防の問題が論議されるようになった。ある師から「戦争は一部の指導者や軍人が始めるのではなく、みえない陰の、ムードのような力が戦争に突入させる。これがおそろしいのである」という話を聞いたことがある。

■戦争にでもなつたら、いまの日本の福祉などあったものではない。こうして戦争ごっこ遊びのようなことをする子供たちも、決して戦場に行かせてはならないと思う。あの「ひもじさ」を経験した最後の方の年代として、その気持は特に強い。

■今年も共々に多忙であった一年が暮れようとしている。「まなこ」には、提言あり、報告あり、ボヤキありで賑ぎやかである。読まねばならない本や文書が机の上いっぱいだけれど、これも一度は目を通してほしい。

(飯塚市社協 石上淳裕)